

『仮名文字遣』諸本系統の再考

岡田 薫

一 はじめに

筆者は、二〇一一年三月『立教大学日本学研究所年報』第八号「『仮名文字遣』の諸本の系統について」において、書写本である十一種（文明十一年本・文明十二年本・明応四年本・明応九年本（隆量卿假名遣）・天文二十一年本（文安四年本）・永禄四年本・永禄九年本・天正六年本・文禄四年本・慶長二十年本（後陽成天皇写本）・伊達本）、および、版本である慶長版本一種の計十二種の『仮名文字遣』の系統について検討した。その結論は以下のとおりである。

① 藤原親長の奥書を持つ明応九年本・文禄四年本の二本と三條西公條の奥書を持つ文禄四年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・慶長版本・伊達本の四本は同じ系統に属すること、また、明応四年本の「わ」の見出し語十二語が文禄四年本・伊達本・慶長二十年本・慶長版本において記載されていることから、明応四年本はこの系統に関連がある『仮名文字遣』

であることを指摘した。

② 文明十一年本と文明十二年本の見出し語の一致率は極めて低く同じ系統とは認められない。また、親長とは別の系統であることを指摘した。

③ 大友信一が「兄弟本の関係にある」と指摘した^②、文明十一年本と永禄九年本は、筆者が調査した見出し語の一致率の高さと、他の『仮名文字遣』では若干の違いがあるのに、二本に共通する見出し語が多数あること、その一方で、この二本に限って見出し語が記載されていない語も二百余りもあることから、同系統である可能性が高いといえることを示した。

④ 永禄四年本・天正六年本については、共通する見出し語の一致率も九八%と極めて高く、永禄四年本と天正六年本が同じ系統に属するものと推定できる。

⑤ 天文二十一年本（文安四年本）は独自の見出し語が多数あり、その独自の見出し語が継承される形で書写された『仮名文字遣』は見当たらず、別の系統であると考えられるとした。以上が結論である。今回の調査においても、この結論は基本的

に変わることはない。

本稿では、新たに、明応四年（文明十三年）の最終の奥書を持つ国会図書館蔵『假名文字遣』、冷泉家時雨亭叢書『假名文字遣拾遺』（三）二〇一七年十二月に収載されている『假名遣』、東北大学狩野文庫蔵『假名文字遣 完』、慶長七年の奥書を持つ清泉女子大学附属図書館蔵『假名文字遣事 全』の四種を目にすることができたので、この四種が『假名文字遣』の系統のどの部分に属するののかについて検討したいと思う。

二 四種の『假名文字遣』と検討の方法について

まず、本稿で考察に加えることにした四種について述べることにする。

二一 『假名文字遣』（国立国会図書館蔵 油小路本）

国立国会図書館において画像が公開されている。本稿においてはじめて紹介する一本である。

国立国会図書館蔵『假名文字遣』は「本書ハ昭和四六年十一月二六日購求セルモ損傷多ク直ニ当館ニ於テ補修ヲ行ナヘリ然レドモ後日錯簡アルヲ知り、今仮ニ慶長版『假名文字遣』ト交合シ付箋ヲ貼付」シテソノ短ヲ補ウモノナリ、昭和五四年三月」という付箋が表紙に貼り付けられている。このような付箋は慶長版本の『假名文字遣』と照合された際に貼られたもので、本文中の錯簡および書き漏らしたとされる部分について、十一カ所に貼られている。錯簡部分に関しては順序を元あった部分に入れ替えること

で、検討することが充分可能なものであると考えて、考察の一冊に加える。

本稿の調査によると、見出し語の総数は、一七八〇例である。

内訳を記すと、を¹一七二、お一九六、え一三七、ゑ一〇六、へ²一三九、ひ一六七、い二七八、ゐ六四（ゐの項に記載されている具体的な位の名称については見出し語数に含めていない）、ほ九一、わ二七、は八九、む三七、う一五七、ふ一九である。このうち、「を」の見出し語「し、ひしを」から「をよひ」までの一頁分の二三語³、「へ」の見出し語の最後の部分、および「ひ」の見出し語の最初の部分の一頁分の一八語⁴が、「い」の見出し語の二三語⁵が、「は」の見出し語の最後の部分の十九語⁶が、及び「ふ」の見出し語の二三語⁷についてそれぞれ欠落が見られる。

目録があり、目録の中に、「一端ほ 中を 奥お」、「一端い 中ゐ 奥ひ」、「一端へ 中え 奥ゑ」、「一端家卿口伝」の「二人丸秘抄」と書かれている。「一端家卿口伝」は「端へ」の最初から二五語ほど欠落がみられる。「二人丸秘抄」は収載されていない。また、奥書の前頁には、「一 草子書始様事」、「一 文字嫌事」が書かれている。これは、他の『假名文字遣』には収載されていないものである。

奥書を左記に画像で示した。

奥書には「建保四年（一二二六年）三月十八日前中納言藤原朝臣定家在判」「弘長二年（一二六二年）八月十一日前中納言藤原朝臣為氏が在判」「正応三年（一二九〇年）正月吉日侍従藤原朝臣為実在判」と記されている。その後「正和三年（一三二四年）二月十一日蚊山〇〇通春在判」「応永三年（一三九六年）六月三日〇〇寺僧正真覚在判」「応永三十年（一四三三年）十月十八日右近衛権中将源朝臣具世⁸在判」「文安四年（一四四七年）六月晦日右近衛中位源朝臣教具⁹在判」「文明二年（一四七〇年）九月十三日御冷泉院御本九写龍若丸」「同十三年（一四八一年）正月二三日書之学質在判」となっている。

また、『仮名文字遣』に錯簡があるためと思われるが、画像のコマ番号九〇には、左記のように記されていた。これはこの『仮名文字遣』が明応四年（一四九五年）七月二日に三本を校合したものであることを記したものである。

卷末には墨書で慶長二曆丁酉卯月十五日求之／堅者法印尊雄と記されている。



また、古筆了悦極書の添付の中には左記の文言が見える。

『假名文字遣』一冊／油小路中納言隆繼卿／正筆／天海僧正花
○印／有也

このことは、油小路中納言隆繼卿（一四六九年～一五三五年）^⑩の正筆であることを示すものである。

油小路の姓については、隆繼卿は四条家であるが、子の隆秀が早世したことで断絶し、その後、広橋兼勝二男隆基が再興して、油小路の姓を名乗ったということである。この『假名文字遣』については「慶長二（一五九七年）曆丁酉卯月十五日求之」と記されており、明らかに明応四年の奥書と文明十三年の奥書の墨の色と筆跡が異なる。油小路中納言隆繼卿の正筆とのものであり、油小路中納言隆繼卿の生没年と照らし合わせてみても、明応四年は存命中であり不審な点はない。

そこで、この『假名文字遣』の奥書の年を明応四年と考えて良いと思われるが、すでに明応四年本が他にあるので、ここでは、便宜上、「油小路本」と呼ぶことにする。なお、この『假名文字

遣』は桐箱におさめられており、大切に扱われてきたことが窺える。

さて、最も気になる部分である奥書の信憑性について考察してみたい。

まず、「建保四年（一二二六年）三月十八日中納言藤原朝臣定家在判」の奥書であるが、藤原定家は一一六二年～一二四一年没とされている。一二一六年は五十四歳で存命中であり、奥書の年月日について不審なところはない。次の奥書である「弘長二年（一二二二年）八月十一日中納言藤原朝臣為氏在判」の人物である藤原為氏（二条為氏）は一二二二年～一二八六年没とされている。和歌の家である二条家の祖である。為氏についても奥書の年月日は存命中であり不審な点はない。

三番目の奥書である「正応三年（一二九〇年）正月吉日侍従藤原朝臣為実在判」であるが、藤原為実（五条為実）は、一二三六年～一二三三年没とされている。この為実についても奥書の年月日は存命中であり不審なところはない。その後には書かれた奥書の人物については不明なところもあるが、源朝臣具世、源朝臣教具は歴史に名のある人物のようである。龍若丸、学質については不明である。

この『假名文字遣』には「假名文字遣」の錯簡により途中に「明応四年」の奥書があること、また、「一 草子書始様事」、「一 文字嫌事」の次の頁に藤原定家をはじめとする奥書があるのであるが、定家の奥書に並んだ九つの奥書は、当初「一 定家卿口伝」「二人丸秘抄」「一 草子書始様事」、「一 文字嫌事」に記されていたもので、その奥書が『假名文字遣』が加わった時点でも消

されることなく、書き継がれてきたという推測である。

従って、この『仮名文字遣』の「一定家卿口伝」「二人丸秘抄」「一草子書始様事」「一文字嫌事」を除外した部分の最終の奥書は明応四年と考えるものである。

二一 二 『假名遣』（冷泉家所蔵）冷泉院本

冷泉家時雨亭叢書『仮名文字遣拾遺』(三)二〇一七年一月により影印を見ることが出来る。この『仮名文字遣』は室町時代後期の写本で、重要文化財に指定されているとのことである。遠藤邦基の「解題」によると、冷泉家第一四代為久(二六八六一―七四一)の修理で新表紙と為久筆の外題が付けられ、各帖の左下には手垢による汚れがあるので、歌会や連歌会などに持参して日常的に利用されていたものではないかと推察されている。また旧表紙の左下には冷泉家第七代為和(一四八六一―一五四九)の花押が据えてあるとのことである。ただ、旧表紙と墨付本文の綴じ穴に相違があることから、為久修理の際に他本より転用されたと思われるとのことである。他の『仮名文字遣』とは異なり、「五韻相通字事」(五十音)が、まず記されていて、その後、目録があり、そこに「一定家卿口伝」「一人丸秘抄」と記されている。

冷泉院本には、これらは巻末にはないが、別冊に収載されている。

ただし、別冊に収載されている「家定(ママ)卿假名遣少々」と「人丸秘抄」は平仮名と漢字ではなく、漢字と片仮名で記されている。そして、冷泉院本のみが目次の記載について「二人丸秘抄」ではなく「一人丸秘抄」となっているという特徴がある。続

いて「仮名文字遣事」の序文がある。一四項目の最後の見出し語の「きふ丹 急」の後に、行を代えて、「假名遣」と記されていて、奥書も年月日も記されていない。

白黒印刷であるので、朱で書き込みがあるところは、遠藤邦基「解題」によって、一二頁―一五頁に示されている。

見出し語の総数は筆者の調査では一六三二語(棒線で消してある見出し語、および、「ゐ」の見出し語に記載されている具体的な位の名称については例数に含めていない)である。また、そのうち、片仮名書きの見出し語が二〇語ある¹⁾。片仮名書きの見出し語は当初から存したのではなく、「イ」本と注記があることから、のちに書き加えられたものであるとのことである。

本稿で調査した見出し語の内訳を記すと、を一八八、お一四七、え一三四、ゑ五八、へ一一五、ひ一一一、い二五四、ゐ九三、ほ八六、わ二一、は一〇五、む三五、う一四四、ふ一三一である。

この『仮名文字遣』については、「い」の項目において一丁分欠落しているところがある。「いりこ」から「すはいり」までの三七語である。同様に、「ひ」の項にも三〇前後脱落と錯簡がある²⁾と言われている。

この『仮名文字遣』は奥書の年号が記されていないので、便宜上、「冷泉院本」と呼ぶことにする。

二一 三 東北大学狩野文庫所蔵『仮名文字遣 完』狩野本

この『仮名文字遣』の中の表紙には「仮名文字遣 完」と記されている。まず、仮名文字遣の序文があり、その後に目録がある。目録には「一定家卿口伝」「二人丸秘抄」と書かれてあるが、実

際には、『假名文字遣』の後につけられていない。このことは、慶長版本と同じであり、奥書についても慶長版本と同じである。

なお、奥書とは別に「三万坂 浅井」と記されているが、人物については不明である。

見出し語の総数は、慶長判本と同数の一八八一例である。総数が同じというだけでなく、見出し語の提出順も同じである。本稿で調査した内訳を記すと、を一九九、お二〇八、え一四六、ゑ六七、へ一四七、ひ一八二、い三〇八、お一〇〇、ほ八六、わ三四、は一〇五、む三五、う一四二、ふ一二二である。

この奥書の年号は、天文二十一年と記されており、慶長版、伊達本と同じであるので、この『假名文字遣』を便宜上の呼び名として「狩野本」と呼ぶことにする。

二一四 『假名文字遣 全』（清泉女子大学図書館蔵）慶長七年本

この『假名文字遣』は清泉女子大学図書館が所蔵しているものである。亀井孝旧蔵本とのことである。⁵⁾

「假名文字遣事」の序文があるが、その後には、目録が記されていない。次頁から、「を」の見出し語が始まっている。

見出し語の総数は筆者の調査によると、一七二二例である。

本稿で調査した見出し語の内訳を記すと、を一八五、お一八二、え一三五、ゑ二四、へ一二〇（「たぐひとも」という見出し語が「へ」の中に見られるが、それも含む）、ひ一六〇、い二九二（見出し語が滲んで読めない一語を含む）、お一〇〇（具体的な位の名称は含んでいない）、ほ八五、わ二二、は一〇九、む三四、う

一四三、ふ一三〇である。

この『假名文字遣』では、朱色の二本線は「拾遺愚草」「万葉集」などの本の名称に、朱色の一本線は人名に引かれている。また、平仮名の見出し語の上には朱色の点、その下の漢字の右上横には朱色の斜め線が引かれている。濁点は、朱色で記されている。

なお、この『假名文字遣 全』も落丁が一丁分ある。ゑの項は二四語と極端に少なく、「こすゑ」から「すゑのまつ山」までの四〇語⁵⁾に欠落がある。奥書については、「干時慶長第七 八月下旬七 是庵」とあり次頁には「三條大納言實條卿以御本校合」「榮受院殿御遺物」と記されている。この『假名文字遣』は今野真二（二〇一六）『假名遣書論攷』和泉書院の一九頁から二一頁にかけて紹介されている。そこでは慶長七年本と呼ぶこととすると書かれており、それに従うことにする。

本稿では、油小路本『假名文字遣』（国立国会図書館蔵）、冷泉院本『假名遣』（冷泉家所蔵）、狩野本『假名文字遣 完』（東北大学狩野文庫所蔵）、慶長七年本『假名文字遣 全』（清泉女子大学附属図書館蔵）の四種を新たに加え、主にこの四種がどの系統に位置するのかについて検討をしていくことにする。

二一五 検討の方法について

分析のために使用した資料は次の十七種である。

- ① 文明十年本（一四七八年）赤堀又次郎『語学叢書第一編』（東洋社、一九〇一年）
- ② 文明十一年本（一四七九年）（東京大学国語研究室所蔵）
- ③ 文明十二年本（一四八〇年）（京都大学国語研究室所蔵）

- ④ 明応四年本（一四九五年）（国文学研究資料館蔵）（旧橋本進吉博士蔵）
- ⑤ 油小路本（十四九五年）『假名文字遣』（国会国会図書館蔵）
- ⑥ 明心九年本 隆量卿假名遣（一五〇〇年）（京都大学国語研究室蔵本）
- ⑦ 天文二十一年（一五五二年）・文安四年本（一四四七年）（山田孝雄氏蔵本）（東京大学国語研究室大正五年写）
- ⑧ 永祿四年本（一五六一年）（京都大学図書館蔵本）
- ⑨ 永祿九年本（一五六六年）（東京大学国語研究室蔵本）
- ⑩ 天正本六年本（一五七八年）（駒澤大学図書館濯足文庫蔵）
- ⑪ 木村晟編『古辞書研究資料叢刊第一卷』（大空社、一九九六年）に影印がおさめられている。
- ⑫ 文祿四年本（一五九五年）（陽明文庫蔵）
- ⑬ 財団法人陽明文庫『陽明叢書国書篇第十四輯中世国語資料』（思文閣出版、一九七六年）に影印がおさめられている。
- ⑭ 慶長二十年本（後陽成天皇宸翰書写本）（京都実相院蔵）（東京大学国語研究室明治三十八年八月十八日写）
- ⑮ 慶長版本（立教大学図書館蔵）（『古辞書研究資料叢刊第一一刊、大空社一九九六年』の影印）（国会図書館蔵）の三本。
- ⑯ 内容は同じであるが、表紙の題目が相違している。
- ⑰ 伊達本（国文学研究資料館蔵）
- ⑱ 狩野本（室町時代末頃）『假名文字遣』（東北大学狩野文庫所蔵）
- ⑲ 冷泉院本（室町時代末頃）『假名遣』（冷泉家所蔵）
- ⑳ 冷泉家時雨亭叢書『假名文字遣拾遺（三）』（二〇一七年十二月）

月に影印が納められている。

- ⑰ 慶長七年本（一六〇二年）『假名文字遣事 全』（清泉女子大学図書館蔵）

文明十年本は、書写本の実際を見ることができなかつたため、考察すべき見出し語がある場合はその都度赤堀又次郎『語学叢書 第一編』（東洋社、一九〇一年）を参考にすることにした。

分析の方法としては、これらの『假名文字遣』の表紙の題目等、中の表紙の題目等、序文、見出し語を項目ごとにエクセルに入力し、すべてが一目瞭然となる一覧表にした。その上で、表紙の題目等、また、序文の相違点や、「を・お・え・ゑ・へ・い・ゐ・ひ・ほ・わ・は・む・う・ふ」の見出し語の相違点について、系統に関して具体的に考察および検討をしていくことにした。見出し語の一致率も調査した。なお、『假名文字遣』に錯簡がある場合には、元のあるべき位置に直し、落丁がある場合には、例数にはその見出し語を含めることはしなかつた。

三 考察

三―一 諸本の表紙の題目等、中の表紙の題目等の考察

慶長版本は、無刊記本があるため、その表紙の題も相違している。これらの表紙の題目については、例えば、異本を参照している場合には、書写するときに、どの表題を選んで書くかについて悩ましい問題となる。

書写する際には、表紙の題目を継承するのが第一であり、異本を見た場合にはその表紙の題目も考慮にいれると思われるが、い

ずれせよ、表紙の題目からも、系統を考える上で参考になるところである。

○定家、もしくは定家卿と表紙および中の表紙にあるもの
定家の名のつく『假名文字遣』は五本あった。

・文明十二年本―『定家卿假名遣 全』（中の表紙には『寒 定家卿假名遣』）

・永祿四年本―『定家卿假名遣 永祿四年書写』

・天正六年本―『假名文字遣定家 〃、千ノ二三番』

・慶長版本―古辞書研究資料叢刊第一一刊、大空社一九九六年
の無刊記本の表紙には『定家かな遣 全』

・伊達本―『定家卿假名遣』

○『假名文字遣』となっているもの

『假名文字遣』となっているものは八本あった。

・文明十年本―『假名文字遣 附定家卿口伝 人丸秘抄』

・明応四年本―『東藏院 假名文字遣』

・油小路本―桐箱の中央に『假名文字遣 全』と紙が貼り付けてあり、表紙および中の表紙に題目等なし

・天文二十一年本（二五五二年） 文安四年本（二四四七年）―『假名文字遣』

・文祿四年本―『假名文字遣』

・慶長二十年本―『假名文字遣』

・慶長版本―国会図書館蔵では『假名文字遣 慶長板』

・狩野本―『假名文字遣』、中の表紙には『假名文字遣 完』

○独自の名が付けられているもの

・冷泉院本―『假名遣 松海ハカセ』、中の表紙には『假名遣付

假名遣付 假名遣付 花押』

・明応九年本―『隆量卿假名遣 完』（中の表紙には『鴛尾殿隆量卿假名使全部』）

・慶長版本―立教大学蔵本の表紙には『羅』

・慶長七年本―『假名文字遣事 全』

○表紙および中の表紙に題目等がないもの

・文明十一年本・永祿九年本

表紙および中の表紙に題目等がないものとして、文明十一年本と永祿九年本があるが、これらは同じ系統であるし、永祿四年本と天正六年本についても「定家」の名前が見られるが、この二本についても同じ系統であることがすでに明らかにになっている。

三―二 奥書の考察

まず、奥書の名が誰になっているのかという点は、系統を考える上でも極めて重要な位置を占めるところである。

奥書の名については以下のように、大きく分けて四つに分類することができる。

○按察使藤原親長の奥書があるもの

文明十年本¹⁹・明応九年本・文祿四年本の三本。

○「三條西殿前右大臣公條御奥書」²⁰があるもの

文祿四年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・慶長版本・伊達本・狩野本の五本。

○三條西殿前右大臣公條の奥書もあるが、他の人物の奥書もあるもの

慶長二十年本（後陽成天皇書写本）

○按察使藤原親長および三條西殿前右大臣公條とは違う人物の奥書のあるもの

文明十一年本・文明十二年本・明応四年本・油小路本・天文二十一年本（文安四年本）・永祿九年本・慶長七年本の七本。

○奥書において人名が全く記されていないもの

永祿四年本（印影はあり）・天正十六年本・冷泉院本の三本。

「按察使 藤原親長」の奥書は、文明十年本、明応九年本、文祿四年本に見られ、「三條西殿前右大臣公條」の奥書に続いた『仮名文字遣』が文祿四年本である。「三條西殿前右大臣公條 御奥書」については、文祿四年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・慶長版本・伊達本・狩野本の五本に見られるが、それ以前の『仮名文字遣』にはこの奥書は見られない。

序文はすべての『仮名文字遣』に記されているのに対して、奥書については『仮名文字遣』の伝来や書写の由来を示すものとして重要なものであるが、それが記されていないものも三本あった。奥書で一番古いものとされていた『仮名文字遣』は、天文二十一年本に見られた「文安四年」の奥書であった。しかし、この「文安四年」の部分は薄墨で記されており、山田孝雄²¹によって、後に書き加えられたものとの考察もなされている。

藤原親長の文明十年二月八日の奥書は、当時の権勢を示すものとして認められ、奥書は明応九年本、文祿四年本にも継承され、その一門の隆盛をも示すものでもあったと考えられる。その隆盛を示すものとして、慶長版本へとつながっていったものと考えられる。

三・三 序文の「表題」の考察

序文の表題がどのように書かれているかで分類すると以下の二種類のものがあった。

○「假名文字遣」となっているもの

天正六年本・慶長版本・伊達本・狩野本、以上四本。

○「假名文字遣事」となっているもの

文明十年本・文明十一年本・文明十二年本・明応四年本・油小路本・明応九年本・天文二十一年本（文安四年本）・永祿四年本・永祿九年本・文祿四年本・慶長七年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・冷泉院本、以上十三本。

このことから、少なくとも慶長版本・伊達本・狩野本の類似性は確認できる。

三・四 序文の撥音の表記の考察

序文の撥音の表記の違いに着目すると、次の二種類のものが見られた。

○「ひらかんかために」となっていたもの

文明十年本・文明十二年本・明応四年本・油小路本・明応九年本・天文二十一年本（文安四年本）・文祿四年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・慶長版本・伊達本・狩野本・冷泉院本、以上十二本。

○「ひらかむかために」となっていたもの

文明十一年本・永祿四年本・永祿九年本・天正六年本・慶長七年本、以上五本。

この部分は、古態を保ちつつ書写したかがわかる部分で

あるが、文明十一年本・永禄四年本・永禄九年本・天正六年本・慶長七年本の五本については、この部分に関しては、古態を保つたままて書写したものとと思われる。

三・五 序文の「後学のために」「後学を導んかために」の考察

○「後学のために」となっていたもの

文明十年本・文明十一年本・文明十二年本・油小路本・明応九年本・天文二十一年本（文安四年本）・永禄四年本・永禄九年本・文禄四年本・慶長七年本・慶長二十年本（後陽成天皇書写本）・慶長版本・冷泉院本・狩野本、以上十四本。

○「後学を導ん（む）かために」

明応四年本・伊達本・文禄四年本（「を導ん」イとある）、以上三本。

伊達本については、慶長版本と類似しているが、「後学のため」ではなく「後学を導ん（む）がために」とあることから、奥書が「三條西殿前右大臣公條御奥書」の部分では同じであったが、伊達本は、慶長版本を書写したものではないということがわかる。

四 系統について

四・一 系統の二分類

系統については十七種の『仮名文字遣』だけで、分類すること
が可能なのかという意見もあろうかと思いが、エクセルにすべ
ての見出し語を入力し、一覧表を作成して対比させることによつ

てそれが可能となった。この系統については、主に『仮名文字遣』
のそれぞれに共通する見出し語の一致数と、奥書の継承性の観点
から分類を試みたものである。

系統は二つのグループに大きく分類することができる。

第一グループ

文明十年本・油小路本・明応九年本・文禄四年本・伊達本・慶長
二十年本（後陽成天皇宸翰書写本）・狩野本・慶長版本

これらは、さらに三つに分けることが出来る。□で囲った部分
は、現時点では存在が確認されていない『仮名文字遣』である。

① 何本かの書写本↓文明十年本↓明応九年本↓天文二十一年
三條西公條奥書本↓文禄四年本

② 三本の書写本↓油小路本（三本の校合したもの）

③ 書写本↓明応四年本↓天文二十一年三條西公條奥書↓伊達
本・慶長二十年本・狩野本・慶長版本

これらの『仮名文字遣』には、按察使藤原親長および三條西殿
前右大臣公條の奥書の存在がこの二人の奥書を持たない『仮名文
字遣』と系統を分ける上での大きな相違点となっている。なお、
油小路本は按察使藤原親長および三條西殿前右大臣公條の奥書が
無いにもかかわらず、見出し語の類似性があることから第一グル
ープに分類される。明応四年本は「わ」の見出し語から藤原親長・
三條西公條の奥書は記されていないが③の系統と関連すると推定
される。

第二グループ

文明十一年本・永禄九年本・文明十二年本・天文二十一年本・冷
泉院本・明応四年本・永禄四年本・天正六年本・慶長七年本

これらは四つに分けることが出来る。

㊸ 書写本↓文明十一年本↓永祿九年本

㊹ 書写本↓文明十一年本および文明十二年本の合本の書写本

↓冷泉院本↓永祿四年本↓天正六年本↓慶長七年本

㊺ 書写本↓文安四年本↓文明十一年本および文明十二年本の合本の書写本↓書写本↓天文二十一年本

㊻ 書写本↓文明十一年本および文明十二年本の合本の書写本

↓明応四年本……「わ」の見出し語のみ「天文二十一年三條西公

條奥書」↓文祿四年本・伊達本・慶長二十年本（後陽成天皇宸翰

書写本）・狩野本・慶長版本

四―二 油小路本の系統について

油小路本は第一グループの㊸三本の書写本↓油小路本である。

藤原親長および三條西公條の奥書は見られないが、見出し語の共通性から第一グループに分類した。

第一グループの文明十年本・油小路本・明応九年本・文祿四年本・伊達本・慶長版本・狩野本・慶長二十年本（後陽成天皇宸翰書写本）には記載されているがそれ以外の『仮名文字遣』である第二グループには記載されていない見出し語について述べることにする。

分類を大きく二つに分類した理由としては、文明十年本の奥書の藤原親長から三條西公條に続く系統において、第二グループの『仮名文字遣』よりも一一四語以上も増補された見出し語がみられるからである。

なお、油小路本には藤原親長、三條西公條の奥書がない。それ

ゆえ、見出し語において気になる相違点があれば、それについても言及していく。具体的に例を挙げると次のようである。

・「を」の見出し語

「こをけ 只おけの時ハおなり」「をほひ」「暁をき おき別の時ハお也」「み山をろし 山おろしの時ハお也」「かたをなみ」「たをす」「あをり あふりとも」「たかさこののをえ」「まとをの衣」

「あひをひ」「をしあけかた」「をさへて」「をろそかなり」「たをれもの」「をきのゐて」の十五語。この部分は油小路本では欠落している部分である。

・「お」の見出し語

「きおふ きをひむまのときハを也」^㊼「おほち」「雲おりかゝる」「おひて」「おもる」「おほん」「おして」「あひおひ を共」「水のおも」「おきふし」「おりはへて」「おのゝえ」「およほさん」「おはつて」「おこ」「おさ」「およハぬ をよふ時ハを也」「おもくさ」「なにおふ」「おくして」の二十語。油小路本のみ、「おひて」を「おいて 負」「おもる」を「おもき 重」「およほさん」を「およほさむ」と記している。

・「え」の見出し語

「えならぬ」「えそしらぬ」「えたる」「ほえ」「えにしあれハ」「えふの身」「したかえて」「なえたる」「そひえ」「えのはぬ」「えんてむ（ん）」「うつたえ」「かくろえ」の十三語。油小路本のみ、「えふの身」を「えふか身」と記している。

・「ゑ」の見出し語

「ゑほし へほしとも」「こしらゑて へい」「ともゑ」の二語。
・「へ」の見出し語

「たまへる」「たくへ」「袖のへ」「かんかへ」「かへ」「なからへ」「いそへ」「うつろへ おとろへと」「かまへて」「かへて」「さへつる」「かたへ」「いにしへ」「のはへ」「と、のへ」「そなへて」「なぞらへて」「あちさへ」「さふらへ」「いくへ」「とのへものとのみ物とも」「むまをすへて」の二十二語。油小路本のみ、「かんかへ」を「かむかへ」と記している。

・「ひ」の見出し語

「そこなひて」「おと、ひ」「かよひち」「をひかせ」「をひて」「ころほひ」「をほひ」「あひをひ」「たまひて」「をこなひ」「したひて」「こよひ」「すまひ るイ」「いとひ」「あひして るイ」「あちさひ」「むかひ」「おひて」「いさきよひ」「くなひ」「うたひて」「つたひ」「なひて」の二十三語。油小路本とは相違しなかった。

・「い」の見出し語

「いさる むさるとも」「なまし い なましゐ共」「ついに つゐとも」「けいこ」「おい」「もちい」「まい」「けいしやう」「おいて」「いよく」「ひいき」「ゆ、しい」「ましなひ給ふ」「はい」「おほいまうちきみ」「ないし」「いんくはい」「しのいて」「さいはい」の十九語。油小路本のみ「いんくはい」を「いむくはい」と記している。

油小路本のみ、撥音部分を「ん」ではなく「む」で記した語が見られること、「えふの身」を「えふか身」と記していたことから、文明十年本・明応九年本・文禄四年本・伊達本・慶長版本・狩野本・慶長二十年本（後陽成天皇宸翰書写本）に比べてこれらの見出し語に関しては古態を有していると思われる。

他方、第二グループには記載されているが、第一グループにはなかった見出し語もある。第一グループにあつて第二グループになかった語に比べて十三語と少ないが、具体的に例を挙げると以下のようである。

・「を」の見出し語

「をかへ」の一語。

・「え」の見出し語の「かえてのき」「さえつる」「たえたる（り）」

「かきたえ」の四語。

・「ひ」の見出し語

「さらひ」「なりはひ」の二語。

・「い」の見出し語

「いさらゐ」「つはいもちゐ」「くさもちゐ」「いとすち」³⁰「よりい」と「とををしひらいて」³²の六語。

この事実から、第一グループである文明十年本・油小路本・明応九年本・文禄四年本・伊達本・慶長二十年本（後陽成天皇宸翰書写本）・狩野本・慶長版本と第二グループである文明十一年本・永禄九年本・文明十二年本・天文二十一年本・冷泉院本・明応四年本・永禄四年本・天正六年本・慶長七年本という二つの系統があつたことは明らかである。その分岐点としては、文明十年本の藤原親長の奥書が注目される。そこから二つの系統としての大きな流れが出来上がり、それが天文二十一年三條西公條奥書のある『仮名文字遣』に受け継がれていったことが窺える。

次に文明十年本・油小路本・明応九年本・文禄四年本のみ記載されている見出し語について述べることにする。

第一グループを三つに分けた根拠は、④グループの文明十年本・

明応九年本・文禄四年本、および㊸グループの油小路本の㊹㊺のみに記載されている見出し語の存在である。これらは、第一グループの㊻グループの明応四年本・伊達本・慶長二十年本・狩野本・慶長版本には記されていない語である。具体的には以下の見出し語が挙げられる。

・「ゐ」の見出し語

「ほたくゐ」「ゐなか」「すまる」「はすのはゐ」の四語。

・「ほ」の見出し語

「しほり」「さほしか さをしかとも」の二語。

・「わ」の見出し語

「なわ なはとも(しなわぬ)(しなわ)」「あわ」「いわ」「あわゆき」「わつかは(わくらは)」「わひひと」の六語。

・「む」の見出し語

「むち」「むちうちて」の二語。

・「う」の見出し語

「くはう」「こうしう(こうしゆう)」「かう」「きやう」「かうはさみ」「てはう」「かれうひんか(かれうひん)」「くはんしんちやう」「れいしう(れいしゆう)」「しゆうしやう」「うなひこ」の十一語。

ここで、気になる点としては「こうしう」「かれいひんか」「れいしう」となっているのは油小路本のみである。

・「ふ」の見出し語

「せふ」「とふ」「いとふ」「すまふ すまひとと」「をこなふ

「ましなふ(ましないたまふ)」「こてふにたり」の七語。

これらの見出し語は、第一グループの㊻には継承されなかった

ものである。油小路本はこのことから、文明十年本と明応九年本と文禄四年本と近い系統であるといえる。

次に、㊼のグループの明応四年本・文禄四年本・伊達本・狩野本・慶長二十年本(後陽成天皇宸翰書写本)・慶長版本にのみ記載されている見出し語について述べることにする。

明応四年本には、三條西公條の奥書は記されていないが、文明四年本・伊達本・狩野本・慶長二十年本・慶長版本には三條西公條の奥書がある。

・「わ」の見出し語

「わたる」「わたす」「とわたるふね」「わきまへ」「わらハへ」

「わたくし」「わしのミね」「わかさのくに」「わけはふく」「わかつ」「わかれ」「わかかへ」の十二語。

明応四年本の右記の「わ」の見出し語は重要である。なぜなら、これらの見出し語は、明応四年本・文禄四年本・伊達本・狩野本・慶長二十年本(後陽成天皇宸翰書写本)・慶長版本の『仮名文字遣』にのみ見られる語であり、文明十年本・油小路本・明応九年本には記載されていない。

次に、共通する見出し語の一致数を調査したことから、以下のことが明らかになった。

油小路本の見出し語には欠落があるため「を」「へ」「ひ」「い」「ふ」の見出し語を除外して調査したところ、油小路本において、明応九年本の見出し語が含まれる割合が、九八・七七%と高かった。特に「ゑ」「わ」「む」は油小路本の見出し語が明応九年本にはすべて含まれている。

		明応9	油小路本
項目	一致した数	1500	1597
を	×	(199)	(172)
お	194	204	196
え	137	146	137
ゑ	65	67	65
へ	×	147	139
ひ	×	(182)	(167)
い	×	(308)	(278)
ゐ	103	107	106
ほ	89	90	91
わ	27	27	27
は	×	106	89
む	37	38	37
う	154	155	157
ふ	×	(141)	(119)
計	806	940	816
	一致率	85.74%	98.77%

なお、藤原親長の奥書を持つ文明十年本と明応九年本は見出し語数が酷似している。次の表は見出し語の数を示したものである。文明十年本と明応四年本は、「を」「お」「え」「ゑ」「へ」「ひ」「ほ」「わ」「は」「む」において見出し語数が一致していることがわかる。当然、親長の奥書を継承しているのであるから、共通する見出し語も相当数一致していると思われる。

油小路本は、三本を校合した『仮名文字遣』であることがわかっていて、そのことを踏まえて考えると、文明十年本は、油小路本が書写するのに使用した『仮名文字遣』と似たようないくつかの『仮名文字遣』を校合したものであって、親長によって、見

	文明10	油小路本	明応9	文禄4
西暦	1478	1495	1500	1595
を	199	172	199	197
お	204	196	204	209
え	146	137	146	146
ゑ	67	65	67	67
へ	147	139	147	143
ひ	182	167	182	182
い	307	278	308	307
ゐ	104	106	107	106
ほ	90	91	90	94
わ	27	27	27	40
は	106	89	106	110
む	37	37	38	38
う	157	157	155	160
ふ	141	119	141	145
計	1914	1780	1916	1944

出し語の表記を当時に用いられる表記に改める作業を行ったのではないかと推察されるのである。一方、古態の表現が見られる油小路本は、校合した際に、書写する『仮名文字遣』の見出し語をそのままの表記で、記したのではないかと推察される。

四・三 狩野本の系統について

狩野本は第一グループの④書写本↓明応四年本↓天文二十一年三條西公條奥書↓伊達本・慶長二十年本・狩野本・慶長版本に属する『仮名文字遣』である。

慶長版本と狩野本の共通する見出し語は同数であり、一致率は一〇〇%である。

しかし、若干ではあるが、見出し語の表記が異なるところもある。異なる見出し語の例をいくつか示すが、書き写しの間違いと思われるものもある。その例として、慶長版では、「をこたる」に対して狩野本では「おこたり」、慶長版「なをしの衣」に対して狩野本「なをし衣」、慶長版「おほろけなり」に対して狩野本「おほろけなる」、慶長版「おほけたる」に対して狩野本「おひけたる」などである。

他にも、慶長版と異なる表記をしたものが見られる。例として、慶長版「おほきみ」に対して狩野本「お、きみ」、慶長版「おほきみすかた」に対して狩野本「お、きみすかた」、慶長版「こしらゑて」に対して狩野本「こしらへて」、慶長版「らいたう」に対して狩野本「らいとう」、慶長版「ないけうはう」に対して狩野本「ないけうほう」などが挙げられる。これからは、書きされた当時の「ほ」と「お」の表記や才段の長音の開合の表記の問題が垣間見ることができるといえる。

この東北大学狩野文庫所蔵『假名文字遣 完』については、慶長版と見出し語が一致していることからみても、同じ系統と考えられる。

四一四 冷泉院本の系統について

冷泉院本は第二グループの㊦書写本↓文明十一年本および文明十二年本の合本の書写本↓冷泉院本↓永禄四年本↓天正六年本↓慶長七年本の系統に属する『假名文字遣』である。

冷泉院本には奥書が記されていない。室町時代後期の写本ということである。ただし、『假名文字遣』の旧表紙には冷泉家代七

代為和(一四八六〜一五四九)の花押が据えてあるので、一五〇〇年位あたりで書写されたものではないかと考えられる。

左記の表では冷泉院本と永禄四年本、および冷泉院本と明応四年本の共通する見出し語の一致数について調査した。

		冷泉院	永禄4
項目	一致した数	室町末期	1561年
を	183	188	184
お	136	147	181
え	132	134	135
ゑ	55	58	61
へ	110	115	121
ひ	×	(121)	(152)
い	×	(254)	(296)
ゐ	87	93	102
ほ	83	86	85
わ	20	21	22
は	104	105	109
む	34	35	36
う	142	144	146
ふ	126	131	129
計	1212	1257	1311
	一致率	96.42%	92.44%

「ひ」と「い」については冷泉院本に落丁部分があるため、調査からは除外した。明応四年本では、「わ」の見出し語において、明応四年本・文禄四年本・伊達本・狩野本・慶長二十年本(後陽成天皇宸翰書写本)・慶長版本の『假名文字遣』にのみ見られた十二語について、冷泉院本には存在しないことがある。それに加えて、永禄四年本と冷泉院本に共通する見出し語が、冷泉院本には九六・四二%含まれている。これは明応四年本よりも若干では

		冷泉院	明応4
項目	一致した数	*不明	1495
を	184	188	186
お	135	147	182
え	124	134	127
ゑ	53	58	59
へ	110	115	123
ひ	×	121	160
い	×	254	295
ゐ	86	93	100
ほ	79	86	86
わ	19	21	34
は	103	105	110
む	34	35	35
う	133	144	144
ふ	120	131	124
計	1180	1257	1310
	一致率	93.87%	90.07%

あるが、冷泉院本は、明応四年本よりも永禄四年本に近いことを意味している。

次に、永禄四年本以前の『仮名文字遣』の文明十一年本・永禄九年本・文明十二年本についても検討していく。まず、文明十一年と永禄九年本は同系統であることがすでに明らかになっている。

この二本と冷泉院本を比較すると、この三本の『仮名文字遣』にのみ記載されている見出し語がある。

具体的に示すと、「お」の見出し語の「おほろ」「おなし」の二語、「へ」の見出し語の「かたへ」の一語、「い」の見出し語の「いかり」「いくた」の二語、「ゐ」の見出し語の「しめて」「よぬよひと」の二語、「う」の見出し語の「らうもう」の一語である。

一方、文明十一年本・永禄九年本・冷泉院本の『仮名文字遣』にのみ記載されていない見出し語は、「お」の見出し語では、「おこしこめ」「なこりおしみ」「うら(ち)おもふ」「おろおろ」「かきおさむ」「まおとこ」「おとよめ」「こおほきみ」の八語、「ゑ」の見出し語では「ゑんす」「もくゑんし」の二語、「ゐ」の見出し語では「めしゐ」「ゐようさう」「ゐかひ」の三語、「い」の見出し語では「さくへい」の一語である。他の『仮名文字遣』にはこれらの見出し語は記載されていることから、文明十一年本、永禄九年本・冷泉院本に見られる特徴ともいえる。

次に、文明十二年本と冷泉院本のみ記載されている見出し語は、一語もなかったのに対して、文明十二年本と冷泉院本のみ記載されていない見出し語は、「お」の見出し語の「おはな」「あしのおはな」「おほきみ」の三語、「へ」の見出し語の「うりはへ」の一語、「ひ」の見出し語の「みとのまくはひ」の一語、「い」の見出し語の「いるか」の一語、「ほ」の見出し語の「かほはせ」の一語、「は」の見出し語の「こはたやま」「ときはゐ」の二語があった。

以上のことから、文明十一年本と永禄九年本と冷泉院本の三本の見出し語と、文明十二年本と冷泉院本の二本の見出し語について比較してみると、文明十一年本と永禄九年本と冷泉院本の三本の見出し語の方が、三本にのみ共通する見出し語があること、そして、三本にのみ見られない見出し語も相当数あることから、どちらかというところ、冷泉院本は、文明十一年本と永禄九年本の系統に近いように思われる。見出し語数からみると、冷泉院本が一六三二語に対して、文明十二年本が一〇五〇語、文明十一年本が一

○八〇語、永禄九年本が一三四語、天文二十一年本が一四二二語となっており、冷泉院本はそれに継ぐ見出し語数である。

四・五 慶長七年本の系統について

慶長七年本は第二グループの㊦書写本↓文明十一年本および文明十二年本の合本の書写本↓冷泉院本↓永禄四年本↓天正六年本↓慶長七年本の系統に属する『仮名文字遣』である。

天正六年本は「ゑ」と「ひ」に落丁箇所があり、慶長七年本にも「ゑ」の部分に落丁箇所があるため、共通の見出し語の一致数をみるのに適当ではないため、「ゐ」「ひ」見出し語を除外して共通する見出し語を調査した。

ここでは、天正六年本と慶長七年本、明応四年本と慶長七年本

		明応4	慶長7
項目	一致した数	1495年	1602年
を	184	186	185
お	175	182	182
え	127	127	135
ゑ	×	(59)	(24)
へ	116	123	120
ひ	154	160	160
い	282	295	292
ゐ	94	100	100
ほ	77	86	85
わ	22	34	22
は	107	110	109
む	32	35	34
う	133	144	143
ふ	119	124	130
計	1622	1765	1697
	一致率	91.18%	95.58%

を比較した。天正六年本と慶長七年本では、見出し語の一致した割合は、天正六年には慶長七年の共通する見出し語が九七・三五%あった。明応四年本も共通する見出し語が一致した割合は、九一・一八%ある。しかし、見出し語の一致した総数をみると明応四年本では、一六二二語であり、それに比べて、天正六年本では一四七三語となっている。見出し語数と一致した割合の比較では有意な結論は導くことは出来ないようである。そこで、やはり、大きな相違点としては、四・二で述べたように慶長七年本には、第一グループのみ見られる見出し語が存在しないということが挙げられる。そして、共通する見出し語の一致率からみると、天正六年本のあとに慶長七年本が続いていると考えるのが、順当のよう思う。

		天正6	慶長7
項目	一致した数	1578年	1602年
を	181	183	185
お	178	181	182
え	135	135	135
ゑ	×	(59)	(24)
へ	118	121	120
ひ	×	(129)	(160)
い	268	279	292
ゐ	95	99	100
ほ	80	84	85
わ	21	22	22
は	106	106	109
む	33	36	34
う	135	141	143
ふ	123	126	130
計	1473	1513	1537
	一致率	97.35%	95.83%

五 おわりに

一七種の『仮名文字遣』の系統について検討した結果、以下の点が明らかになった。

『仮名文字遣』の系統は、大きく分けて二系統に分類できる。

第一グループの④の系統として、藤原親長の奥書をもつ文明十年本から明応九年本、そして藤原親長から三條西公條へ続く文禄四年本が存在する。

⑤の系統の油小路本は、明応四年の奥書を持ち、藤原親長の奥書は持たないが、明応九年本と共通する見出し語の一致率の高さからみて、この第一グループに属することが明らかになった。

次に、第一グループの⑥の系統として、明応四年本が「わ」の項目において三條西公條と関わりをもちつつ、そこから伊達本、慶長二十年本、狩野本、慶長版本へと繋がる系統が存在することがわかった。狩野本と慶長版本は見出し語がすべて一致していることから、慶長版本の元となる『仮名文字遣』を写したか、あるいは、狩野本は慶長版本を写したものと思われる。この第一グループの特徴としては、見出し語の多さを挙げるができる。すなわち、第二グループの系統に属する『仮名文字遣』の文明十年当時の見出し語数は、二〇五〇〜一〇八〇であったのに対して、第一グループの系統に属する文明十年本において藤原親長によって示された見出し語は一九一四語もあって、文明十一年本、文明十二年本に比べて、八〇〇あまり多くの語が記されているのである。そして、奥書を記すことによって権威付けがなされて、江戸

時代の出版へと繋がっていったと思われる。

一方、第二グループの系統には、奥書が記されていても、一名のみ、あるいは全く記されていない『仮名文字遣』があり、そのうち文明十一年本、文明十二年本には落丁部分があり、見出し語の一部分がわかるのみで、見出し語数も少なかった。もっとも、共通する見出し語の一致数の調査では文明十一年本と永禄九年本が繋がること、冷泉院本から永禄四年本、天正六年本、慶長七年本へと繋がる流れとなっていることがわかった。また、天文二十一年本（文安四年本）については見出し語の独自性があり、それが、他の『仮名文字遣』に継承されていないことから、第二グループの冷泉院本の系統に属させることはためらわれた。

『仮名文字遣』は当時の辞書的な役割を担っていたと言われている。冷泉院本には、各帖の左下には手垢による汚れがあるので、歌会や連歌会などに持参して日常的に利用されていたものではないかと遠藤邦基が推察されていることから、歌会や連歌の会において、持参した『仮名文字遣』の異なる部分を異本ではこのようになっていると記していったものと思われる。異本ではこのようになっていると記すのとは別に、油小路本では、奥書に三本校合とはつきりと示されていて、『仮名文字遣』ごとに足りない部分を追加し整理するような形で書写をしていったことが示された。おそらく、藤原親長の奥書をもつ文明十年本においても油小路本と同様の作業がなされたと思われる。明応四年本においては、「わ」の項目の十二語が明らかに増補されている。これは、当時の連歌などに必要な語を増やしたという意味で、辞書的な役割を担ったものといえるが、行阿が八項目から一四項目に増補した

『仮名文字遣』の原型を保つという観点から見れば、むしろ実用性を重んじた行為であったともいえる。

他方、藤原親長の系統ではない第二グループでは、校合するとしても二本のみで行われるとか、見出し語の増補が行われていても小規模にとどまったものであると推察される。第一グループと比べて見出し語数の相対的な少なさは見られるが、冷泉院本になつて初めて見出し語が整った形になり、永祿四年本へと繋がつていったのである。

最後に、系統を図示したものと、『仮名文字遣』の見出し語数の表を示すことにする。



注

- (1) 本稿では『假名文字遣』と『假名文字遣』の表記があるが、『假名文字遣』を使用する場合は、『假名文字遣』の該当する表紙の題目を表すこととする。

- (2) 木村晟編輯『駒澤大学国語研究資料第二 假名文字遣』(汲古書院、一九八〇年)大友信一「解題」四四六頁。

- (3) 明応九年本・文禄四年本・慶長版本・伊達本・狩野本と対比させた場合には、「し、ひしを」「にをもゆ おもゆの時ハお也」「をもの おもの共」「をやこ おやの時ハお也」「をこのもの」「こをけ 只おけの時ハお也」「をほひ」「暁をき」「み山をろし」「山おろしの時ハお也」「かたをなみ」「たをす」「あをりあふり共」「たかさこののをえ」「まとをの衣」「あひをひ」「をし明かた」「をさへて」「をろそかなり」「たをれもの」「をきのゐて」「をなし うなし共」「をよひ」の二三語が欠落している。

- (4) 明応九年本・文禄四年本・慶長版本・狩野本・伊達本と対比させた場合、「あつらへて」「た、へて」「たくハへて」「なすらへて なそらへてとも」「たくへて たくひ共」「かすへのかみ」「このかうへ」「わらハへ」「むまをすへて」「かなへのしんよハひほし」以上、「へ」の見出し語一〇語、および「いざよひの月」「まつよひすきて」「いりあひ」「やよひ」「山のかひ」「みつあひ」「あふひ」「はすのはひ」以上、「ひ」の見出し語八語の計十八語が欠落している。

- (5) 冷泉院本・明応四年本・永禄四年本・天正六年本・慶長七年本・明応九年本・文禄四年本・慶長版本・狩野本・慶長二十年本(後陽成天皇宸翰書写本)と対比させた場合には「いかた」「もたい」「しゆかい」「によいしゆ」「すいしやう」「すいかん」「らくたい」「たいまつ」「ついまつのすみして」「ほいくい

ほたいくゑとも「くいせ くゑとも」「くい くゑとも」「らいし」「らいし」「らいたう」「らいはん」「しきいた」「しきいた」「つかさね」「まないた」「しいし」「かいか」の二三語が欠落している。

- (6) 明応四年本・伊達本と対比させた場合には「なにかハする」「うハがき」「いはふ」「ちハやふる神」「よかハ」「かはや」「ひはだふき」「あはたぐち」「あハツの」「いはせのもり」「はた山」「ときは井」「ひろさハのいけ」「なには江」「すハのミヅウミ」「をととはがハ」「しはす」「ひはのき」「かハぜうえう」の十九語が欠落している。

- (7) 明応九年本・文禄四年本と対比させた場合には「ひかふ」「はふ」「あふき」「あふり あおりとも」「うらなふ」「のろふ」「きらふ」「きたふ」「ゆるふ」「ふるふ」「ふるまふ」「たつさふ」「たふふ」「うちはらふ」「にはふ にほとも」「おしみたつふ」「くはふ くだふるとも」「たくふ」「あかふ」「かふ」「かふる」「たくらふ」の二三語が欠落している。

- (8) 堀川具信の息子、堀川具世か？

- (9) 北畠満雅朝臣の嫡子、文明三年没とある。北畠教具か？

- (10) 父は、西川房任、義父は権大納言油小路隆夏。宝徳元(一四四九)年に生まれたとも。

- (11) 冷泉家時雨亭叢書『仮名文字遣 拾遺(三)』遠藤邦基「解題」八頁の片仮名の見出し語は二〇語となっていたが、その他に見出し語はないが、四才三行目「をとる 踊躍 勝劣 マサリヲトリ」がある。

- (12) 冷泉家時雨亭叢書『仮名文字遣 拾遺(三)』遠藤邦基「解題」八頁。

- (13) 明応四年本・明応九年本・永禄四年本・天正六年本・文禄四年本・油小路本・狩野本・伊達本・慶長版・慶長二〇年本と対

- 比させた場合は、「いりこ」「いかい」「いたやかひ」「いへはと」「いかるか」「いなおほせとり」「せきれい」「あいさ」「はいたか」「えつざら」「かひこ」「いたち」「ことい」「ささ」「さいのつ」「いぬ」「まいむ」「いぬゑ」「いぬのはら」「いかむ」「いなく」「いはゆ」「いたき」「いたさき」「ひたい ひととも」「いろこ」「いほ」「とりかい」「ちいさこ」「すいたる人」「人について」「しはふるい人」「いきすたま」「いへにへ」「いひかしく」「いりもの」「すはいり」以上、三七語が欠落。

- (14) 冷泉家時雨亭叢書『仮名文字遣 拾遺(三)』遠藤邦基「解題」七頁。筆者の調査によると、この「ひ」の項目は文明十一年・永禄九年本・文明十二年本・天文二十一年本と比べて、他の『仮名文字遣』の見出し語の数が増加している部分である。

- (15) 今野真二『仮名遣書論攷』(和泉書院、二〇一六年)一九頁。ここでは、慶長七年本・油小路本・明応九年本・文禄四年本・慶長版本・伊達本・狩野本と対比させた場合には「めひ」「あひよめ」「むかひはら」「やしなひこ」「やしなひて」「つくろひて」「ならひて」「なすらひて」「もちひて」「ねかひて」「うやまひて」「ましなひて」「すくひて」「くひて」「ひろひて」「うろふとも」「あらかひて」「うつろひて」「あひて」「うつろひて」「したかひて」「そひて」「そへとも」「とひて」「とふらひて」の二四語が欠落している。

- (16) 明応四年本・明応九年本・永禄四年本・天正六年本・文禄四年本・油小路本・狩野本・伊達本・慶長版・冷泉院本と対比させた場合は、「こすゑ」「すゑ」「ゆくすゑ」「ゆくゑ」「もとすゑ」「ゑむ」「ゑむ」「ゑふ ゑひて えふとも」「こゑ」「ゑくほ」「こゑたり」「ゑふ」「ゑしのたく火」「とのゑもる身」「こゑぬこととも」「あを馬のせちゑ」「たうかのせちゑ」「大しやう

ゑ」「しんしやうゑ」「ゑんかのさ」「位にすゑたてまつる」「いしすゑ」「す物」「すゑて」「ゑくし」「ゑく」「ゑんす」「つゑ」「もくゑんし」「ゑるゑる共」「ゑ」「たミゑ」「ゑかく」「さむしゑ」「日にゑいして」「ものゑんし」「すゑのまつ山」以上、四〇語が欠落している。

(17) 三條大納言實條卿は三條西公國を父として天正三年（一五七五年）に生まれ寛永一七年（一六四〇年）没。

(18) 左大弁房長を父として、応永三二年（一四二四年）に生まれ、明応九年（一五〇〇年）没。康正二年（一四五六）から明応年（一四九三年）まで陸奥出羽按察使（都護）の任にあった。

(19) 今野真二『仮名遣書論攷』（和泉書院、二〇一六年）二八六頁。注（一一）には、「文明十年二月八日の藤原親行の奥書は『定家卿假名遣少々』『人丸秘抄』についてのものであるとみるのが妥当で、そうであれば、この『仮名文字遣』を『文明十年本』と呼ぶことはふさわしくない。」と述べている。

(20) 三條西公條は三條西実隆を父として文明十九年（一四八七年）に生まれ、永禄六年（一五六三年）没。仍寛（法名、称名院（号））。

(21) 山田孝雄が『假名遣の歴史』（宝文館出版、一九二九年）で所蔵本として紹介したものである。同写本については、『文安四年云々』の一行は淡墨で小さく別筆で記されているので、後から文安四年の本に拠って記入されたものか。」と山田孝雄が述べている。

(22) 伊達本には記載されていない。

(23) 油小路本では「むまをすへて」の見出し語が欠落部分にあたる。

(24) 永禄九年本には記載されていない。

(25) 永禄九年本には記載されていない。

(26) 天文二十一年本、文明十二年本には記載されていない。
(27) 天文二十一年本、文明十二年本、文明十一年本、永禄九年本には記載されていない。

(28) 文明十二年本には記載されていない。

(29) 文明十二年本には記載されていない。

(30) 文明十二年本には記載されていない。

(31) 文明十二年本には記載されていない。

(32) 文明十一年本・文明十二年本・永禄九年本・天文二十一年本にも記載されていない。

（おかだ かおる 本学講師）